

林縁部でケンボナシの果実、ササの葉、ヤマグワの樹皮をよく採食した。

飛驒山系槍ヶ岳周辺に棲息するニホンザルの高山帯への適応についての生態学的研究

泉山茂之（野生動物保護管理事務所）

1989年度の調査は2月から11月までの65日間、1988年度に引き続きラジオテレメトリ法を用いて実施した。4月2日、高瀬川最源流に棲息するYN群（40頭）のオトナメス（9才）をわなにより捕獲、テレメーター発信機を装着した後放し、この個体を追跡することにより群れの追跡を実施した。また本年はSBC信越放送（本社長野市）の協力を得て、ヘリコプターによるロケーションを実施できた。ヘリコプターによるロケーションは5月4日から11月2日までの間合計8回実施した。岩山であり急峻な調査地域において、シャープな2メーター発信波は反射が激しく正確な追跡は熟練を要するが、上空からのロケーションは発信波をダイレクトに拾えるため極めて有効であった。しかし、パイロットの腕に左右されること、危険が大きいことなどに加え、騒音が大きいため上空からの群れ個体の観察は極めて困難で、群れの一部を観察したのは5月4日の1回のみであった。1988年、1989年度の積雪期の利用地域はそれぞれ2.25km²、2.50km²でほとんど変化がなかった。また、無雪期の遊動が安定する7～9月の利用地域もそれぞれ11.75km²、12.50km²で変化がなく安定している。両利用地域ははっきり分れ、無雪期には積雪期の利用地域を利用することはなかった。

春季の垂直移動期のヘリコプターによるロケーションポイントは6月14日、2,200m付近、6月25日、2,500m付近で、ダケカンバ、ミヤマハンノキなどの萌芽前線と一致し、ゆっくりと新芽を追いつながり山を登っていると考えられた。また逆の秋季の垂直移動期の遊動は非常に複雑で9月29日、2,900mから3日後には1,700mに出現、アップダウンを繰り返した後10月21日には2,700mに出現、さらに11月2日には積雪40～50cmの2,550mに出現した。しかしこの後11月14日には積雪期の利用地域に戻り、冬芽、樹皮などを採食する冬の生活に入っていた。

YN（槍ヶ岳）群の群れサイズは1987年42頭、1988年37頭（+αあり）、1989年40頭とほとんど

変わっていない。槍ヶ岳から東方の亜高山帯以上の高山域には高瀬川籍の本群の他に中房川籍、烏川籍、梓川籍の3群が出現し、今後これらの群れの関係について研究を進めて行きたい。

下北半島西北域におけるニホンザルの生息環境と地域個体群の動態

森 治（下北野生生物研究所）
和田 久（第一田名部小学校）

下北半島西北域のニホンザルは奥戸川流域を中心として遊動するM群、その東側、易国間川から大沢目沢にかけて遊動するI群、M群の南側、材木川から古佐井川の焼山沢にかけて遊動するZ群、それにM群の遊動域内の小さな群れAr群がいられている。

今年度はこのうち、I群とZ群について生息環境と群れの動きについて調査した。

（1）I群について

かつてI群は易国間川の本流およびその支流を利用していましたが、数年前より遊動域が東へ拡大し、大沢目沢に達した。これに先行して易国間川の小川目沢にそって林道が開設され、伐採が進められていた。この群れは一時、それを疑う現象もあったが、今年度の調査で分裂が確実となった。

（2）Z群について

この群れもI群とはほぼ同じ時期に遊動域が拡大し、分裂し、現在では、ひとつの群れは、かつての遊動域のより人家に近い地域を利用し、他の群れは山地の奥の地域を南側に利用域を拡大している。

（3）不明の群れ

これまで40年ほどにわたって群れの情報のなかった大畑川の上流で、一昨年に群れ目撃の情報があった。その後の調査で昨年1月、群れの観察例（和田）があり、今年2月に食痕による群れの移動跡の観察（森）があった。

昨年春の食痕調査により、この群れがI群に起因するものではないことが確かめられたが、Z群の分裂群か、全く新しく発見されたものかは不明である。

（4）環境条件と利用域の変化

I群とZ群の遊動域の拡大、分裂に基本的に作用しているのは森林伐採による環境変化であるこ

とは確かであるが、遊動コースの年次変動はその年の気象条件、特に積雪量と融雪期の違いにかかわることが、I群の東側の群れ、Z群の人家寄りの群れの行動から推測できる。

課 題 3

ヤクザルの糞分析による上部域・下部域における食性の比較研究

大竹 勝 (日本モンキーセンター)
長井 三郎 (屋久島産業文化研究所)

ヤクザルの野生群における高度差による食性の違いを明らかにするために、前年度につづいて定期的に同一地域で糞の収集を行い、秋にむれの分布状態を併せて調査した。

上部域は、黒味林道1000m～1200m地点で90個、下部域は、西部林道川原地区で100個、合計190個の糞の収集を行い、水洗乾燥後に実態顕微鏡下で分析した。糞の数が1988年度より少なかったのは、上部域・下部域共に群れの林道利用率が低下していることがあげられる。上部域では黒味林道最奥部までシカ猟が行なわれ、犬の糞を林道上で発見したこともありヤクザルの遊動域がかなり変化したと思われる。下部域の西部林道瀬切地区の道路改修工事のため前年度収集地域での収集が困難となり川原地区の群れの糞の収集を行なった。

糞分析の結果は前年度と同じ傾向を示しているが、特筆すべきは上部域の糞からシキミの種子が検出されたことである。1983年夏の調査でシキミの枝先食を直接観察をしているが、シキミの種子が糞から検出されたのは初めてである。毒性が強いとされる果実を上部域のヤクザルが常食としているのか。偶発的に食しただけなのかは今後の調査の課題である。8月の糞ではハウロクイチゴの種子が糞内容に点める割合が非常に高く、出現率も高い。この中にコバノフユイチゴの種子が量は少ないが、高い出現率を示している。このことからイチゴの季節に上部域のヤクザルはこの果実を求めて遊動していると考えられる。

下部域ではアコウの種子の出現率が高いが、前年より量が少ない。また前年少なかったハナガサノキの種子量が多い。これは瀬切と川原の植生の違いなのか種子の稔りの多少によるものか今後検討が必要である。秋の西部林道域の糞から多量の

昆虫断片が検出されたことも前年度との違いである。

いずれも細片であるがほとんどが半翅目同翅類の小型昆虫と思われる。この仲間は枝先に集中して見られること、年によって大量発生することなどから、捕食が容易で大量に食したと考えられる。

昆虫は植生と同じで上部域、下部域によって分布する種が異なり、昆虫食について不明の点が多く今後の調査で明らかにしたい。

課 題 4

ニホンザル放飼集団における優劣・順位の形成と維持

待田 昌二 (大阪大)

ニホンザルでは一般に集団成員間に安定した直線の順位序列が存在するが、反発的行動は常に一方向的であるとは限らない。本研究では、順位序列と一致しない行動が起こる条件を分析した。観察は京都大学霊長類研究所の放飼集団(嵐山出自)を対象として行なった。本研究では当歳児を除く全個体を観察対象とし、集団成員間に生じた反発的行動をaudio tape recorderに口述記録した。得られた資料は、以前に待田が大阪大学勝山第2実験所のニホンザル放飼集団においてほぼ同じ方法で記録した資料とともに分析され比較された。

2個体のみの関わる争いにおける反発的行動、すなわち、Facial threat, Threat call, Chase, Physical assault, Bared teeth, Screamingをそれぞれ直線の順位序列に最も近くなるよう並べると、Threat callとBared teethにおいてかなり矛盾の少ないマトリックスを得ることができ、それは非交尾期にad lib sampling法により観察したSupplantによる順位序列とほぼ同じであった。その他の4種類の行動では10%～25%の割合でSupplantによる順位と一致しない例が観察された。それらの事例は4種類のどの行動においても、順位の近い個体間及び未成年がloserの場合に有意に多く生じた。以上の結果は両集団とも共通していたが、嵐山集団では未成年雌の関わる争いで多く観察されたのに対し、勝山集団ではむしろ未成年雄においてより不安定であった。勝山集団におけるこのような傾向は観察終了後に起こ